



## 札幌都心で職業性疾病専門 クリニックを開業して

佐藤 修二\*

2008年10月に長年勤めた勤医協札幌病院を退職し、JR札幌駅にあるJRタワー7階に職業病専門のクリニックを開業し、その9階に労働衛生コンサルタント事務所を開設しました。

開業の動機は北海道で職業起因性疾病の診断と治療、補償の手続きなどを支援する医療機関を継続発展させ、この分野を担う後継者を育てたいということです。医療の分野は多岐にわたっていますが、労働衛生の専門家育てるには時間と労力がかかることなので、専門とする独自の医療法人が必要と考えました。

かつて北海道は鉱山や林業、開発事業等で粉じん、騒音、振動という環境に曝露された労働者は何十万人といて、現在でもじん肺、振動障害等の疾病で療養を続けている方は2000人を超えています。振動障害についてはかつて診断できる医療機関は北海道各地にあったのですが、専門医の高齢化が進み、地方都市ではなかなか検査も出来ない状況になっていました。クリニックをJR札幌駅で開業したことによって、そうした地方都市からJRやバスを利用して簡単にアクセスしやすくなり、労働者から喜ばれています。

\* 札幌ワーカーズクリニック労働衛生科 労働衛生コンサルタント・医学博士 札幌市産業医協議会事業部長 日本産業衛生学会産業医部会幹事

札幌駅 JR タワーは5年前に札幌駅前総合開発の目玉として建設された高層ビルでホテル、一流企業のオフィス、洒落た飲食店等が入る洒落たビルです。7～9階が内科や健診センター、整形外科、脳外科、産婦人科などが入る医療モールになっていて、その片隅の狭い空間にクリニックを開設したのです。当クリニックに通院する患者の多くは振動障害、じん肺という元現業労働者であり、一流企業に働くサラリーマンとは一見して容姿も異なり（みすばらしく）、開業当初はビルの管理会社関係者から「ワーカーズさんの患者さんはエレベーターに乗った時にすぐに見分けがつかますね」とイヤミたっぷりの感想が聞こえたりしました。しかし、実際にこの高層ビル建設に携わった患者さんも多数いて、「このあたりの配管を行ったのは自分だ」とか「このビルの隅から隅までだいたいの構造はわかっている」など、自分たちの手で建設したビルだという誇りを持って通っています。彼らから建設当時の苦労話を沢山聞かされました。JRタワーには一流企業の高級スーツに身を包んだサラリーマンが闊歩していますが、「このビルを建設した労働者自身がこのビルを利用して何が悪い」という思いでいっぱいです。家賃はとても高いのですが、意地でもここに踏ん張ることが、苦労してJRタワーを建てた労働者に報いる自分の道だと意気込んでいます。

札幌駅周辺には数多くの企業が密集していますが、不景気のなかで、企業に働く労働者もわが国の労働者がおかれている現状そのままの状況を実感する毎日です。開業してまもなく、近医から紹介された「毎日18時間以上働かされ、休日もなく1ヶ月あたりの時間外労働時間は300時間に達した。体力の限界を超えたので退職したい」と相談に来た若者。また、うつ病で治療しているが病状が良くならないまま復職し、この2年間は出勤しても会社の机に座った



クリニックが入っている札幌駅 JR タワーの全景

ままで何もせずに毎日を過ごしている50歳代の男性。精肉販売店員をしているが、重量物を運んで腰痛のために起き上がれず、会社を休んでいるがすでに傷病手当金支給期間を過ぎてしまった40歳代男性。調理員の仕事を長年続けて変形性指関節症および母指CM関節症で手術するも、私病扱いにされて職場復帰できない40歳代女性。過重な労働で頸肩腕障害の初期症状を呈するマッサージ店の若い店員。職場のいじめに悩む女性。うつ病の治療を続けながらも毎月100時間を超える残業をせざるを得ないシステムエンジニア等々・・・この半年間でも数え切れないほどの職業が原因で病気になった（なりつつある）労働者に会いました。こうした労働者の労働と生活、疾病を把握し、産業医として適切な対応が日々求められていることを痛感しています。

札幌市医師会館で開設している札幌市地域産業保健センター相談窓口はこれまで1カ所でしたが、行政からの要請もあり、相談窓口を増やしたことによってサテライト相談を当クリニックでも行えるようになりました。50人未満の事業場に対する産業保健活動相談、労働者の健康相談などを無料で利用でき、開業医としてはボランティアに近い

活動ではありますが、全体の80%以上を占める中小企業労働者の安全衛生管理を向上に少しでも役立つ活動が出来ればと考えています。

開業して半年ですでに労災申請、公務災害申請が必要な事案は相当数に達しており、労災業務上認定がされたケースも多数出てきています。労災に係る診断や申請はますます難しくなりつつあり、より一層の努力が必要となっています。また労災で療養中の患者の高齢化も目立ちはじめており、全身管理や医療連携が重要な課題となっています。まだまだ軌道に乗ったとは言えない状況にありますが、なんとか北海道における労働衛生の灯を絶やすことなく札幌都心で輝かせ続けたいと思います。